

高槻メディア・リテラシー連続講座～アドバンス編 実践報告

●メディア分析から制作ワークショップへ

高槻市富田青少年交流センターで2001年度から始まったメディア・リテラシーを学ぶ連続講座も2008年度で7回目を迎える。センターでは毎回テーマを変えてメディア・リテラシーの基本概念から学習を始め、ワークショップを通して対話による学びを深めてきたところである。とりわけ、2006年4月に高槻メディア・リテラシープロジェクトがスタートして以来、高槻市富田青少年交流センター主催の連続講座はプロジェクトに参加する人びとがメディア・リテラシーとともに学ぶ場としても機能してきた。

今回のアドバンス編では、「コミュニケーションをどうつくりだすか」と題して、ワークショップによる映像分析、映像制作を通してコミュニケーションを創り出すことの意味を考えよう企画した。ここでは、メディア分析から制作ワークショップへの展開を講座の実践報告という形でお伝えする。

地域でメディアについて学ぶ

いま、私たちはテレビ、インターネット、ケータイ、DVD、映画、雑誌、新聞、書籍など電子メディアから活字メディアに至るまで多くのメディアに囲まれて生活しており、直接経験したこと以外はすべてメディアからの情報によっている。たとえば、アメリカ合衆国の大統領選挙もイージス艦と漁船衝突事件も中国製冷凍ギョーザ事件も大阪府知事の発言も私たちはメディア報道を通して知っているつもりになっているのだ。

しかし、新聞やテレビ、インターネットなどのメディア報道は、社会をそのまま映す鏡ではなく、無限に存在する事実から選択と編集をへて構成されて私たちに提示されている。だからこそ、メディアとは何か、について学び、多面的に読み解く必要性が生まれてくる。メディア・リテラシーとは、メディア社会を生きていく上で欠くことのできない複合的なコミュニケーション能力を獲得する取り組みであると捉えられている。

ところで、高槻富田地区でセンターがメディア・リテラシーに取り組んだきっかけは、1999年に校区の中学校、研究者が協力して学力プロジェクトの一環として「ジェンダーと部落差別」の視点から中学生の意識調査に取り組んだことにさかのぼる。センターの担当者は、調査結果の分析を通して地区の子どもの生き方と深くかかわるジェンダー観について考えようとした時、子どもたちのメディア環境を抜きにすることはできないのではないか、ということに思い至ったという。

そこで、センターでは、子どもたちが学校でメディアについて学ぶ気運を高めていくために、まずおとなとの理解を深める必要があると考え、2001年度からメディア・リテラシーを学ぶ連続講座を企画・実施してきた。講座には校区内外の教師、学生、保護者、ボランティアの人びとが参加している。

その後2006年度には、センター、校区のA中学校が協力して中学校での系統的なメディ

ア・リテラシー教育の実践にむけた調査・研究のために「高槻メディア・リテラシープロジェクト」を立ち上げることになった（NPO 法人メディア・リテラシー研究所が研究協力。部落解放・人権研究所「安田識字基金」助成事業）。

プロジェクトは、2006 年度には中学生のメディア環境調査やプレ授業などの準備をへて、2007 年度から 2 年生の選択科目として前後期各 15 回のメディア・リテラシーの授業を開始した（授業を主として担当しているのは、教科担当の教員と F C T メディア・リテラシー研究所の森本洋介研究員・京都大学大学院教育学研究科博士後期課程）である。中学校側の理解と協力もあり、日本の中学校でここまで体系的かつ理論的にメディア・リテラシー教育を実践研究している学校は他に類例がないと思われる。

おとなのための講座

以上のように高槻富田地区では、センター、中学校、研究者の三者が協力してメディア・リテラシープロジェクトを進めているが、中学校の授業を支えるためにも、毎月のようにセンターで研究会が開催されている。今年も研究会の一環としてメディア・リテラシー連続講座が 1 月 26 日と 2 月 2 日の 2 日間（1 日 5 時間、計 10 時間）にわたって開催された。しかも、今回はメディア分析だけではなく制作活動をしようという企画だ。

先にメディア・リテラシーとは、複合的なコミュニケーション能力であるとしたが、そこには、メディアを読み解く力に加えて、コミュニケーションを創りだす能力も含んでいる。したがって、分析から制作活動へというのは、ごく自然な流れでもある。

実際、2007 年度に A 中学校で実施したメディア・リテラシーの授業でも、最終的に「自分たちが学んだことを次に学ぶ子たちに伝えよう」というテーマで 1 分間の映像作品をグループで制作したところ、素朴ながらとても楽しい作品ができたのである。とはいっても、おとなが学ぶ講座で映像制作の専門家がないのに制作活動が可能なのだろうか、という一抹の不安もあったが、『Study Guide メディア・リテラシージェンダー編』（鈴木みどり編、2003 年、リベルタ出版）第 8 章「私たちのメディアをつくる」で提案されている分析活動から制作への展開を参考にして次のようにプログラムを組み立てることにした。

＜講座プログラム＞

○1 日目（1 月 26 日）午前 10 時～午後 3 時

セッション 1：「メディア・リテラシーとは～クリティカルからクリエイティブへ」（導入講義）

セッション 2：「テレビコマーシャルで学ぶ映像言語」（ワークショップ）

セッション 3：「人種差別をやめよう！P S A」を読み解く（ワークショップ）

○2 日目（2 月 2 日）午前 10 時～午後 3 時

セッション 4：P S A を制作する（ワークショップ）

セッション 5：コミュニケーションを創りだす（合評会）

講座当日はひときわ寒い日だったが、参加者は十数人。A 中や校区の小学校、市外の教

員、センターを利用する保護者、N G O 関係者、企業からと多彩な参加者であった。

プログラムにあるように、初日は導入の講義に続いて、テレビコマーシャルを使った映像言語を学ぶワークショップ。これは、映像言語にしほって 2 種類のテレビコマーシャルを比較分析することによって、メディアのリプレゼンテーション（記号化され構成された表現）というメディア・リテラシーのもっとも基本的な概念を確認することを目的にした。

セッション 3 では、「人種差別をやめよう！P S A」（カナダで開発されたメディア・リテラシーを学ぶビデオパッケージ『スキャニング・テレビジョン』の日本語版（イメージ・サイエンス社）に収録されている <http://www.mlpj.org/pb/pb-sho/com03.shtml>）の分析活動を行い、作品が映像言語を用いてどのようにメッセージを構成しているのかを話し合った。

ここで分析活動に用いた「人種差別をやめよう！P S A」について少し説明しておこう。P S A とは、様式はテレビコマーシャルに似ているが、目的は商品やサービスの販売促進ではなく、公共的な課題についてのメッセージや市民にとって役立つ情報を伝える作品。アメリカやカナダではテレビやラジオで CM の時間に放送されるが、放送局は市民組織が制作した P S A を無料で放送する（『Study Guide メディア・リテラシージェンダー編』（鈴木みどり編、2003 年、リベルタ出版、P149）。

「人種差別をやめよう！P S A」は、カナダの 12 歳から 18 歳までの若い人びとが制作したもので、人種差別撤廃キャンペーンの一環として実施された政府主催のビデオコンテストの優秀作品 10 本である。作品は、45 秒から 60 秒と短いが、それぞれの作品は、制作者が「人種差別」について発言するもの、ドラマ仕立て、ニュース番組の形式、クレイアニメ（粘土）を使用したものなど多様で、凝った映像技法を駆使しているが、中には小さい子どもたちがつくった素朴な作品も含まれている。

毎年開催されるカナダ政府主催のビデオコンテストに子どもたちは、グループで作品をつくって応募するが、優秀作品として選ばれるとテレビで放送され、3 月に開催される首都オタワでの政府主催の人種差別撤廃のためのセレモニーに招待される。審査の基準は、創造性、独創性、差別に反対するという点で効果的なメッセージかどうかということである（カナダ文化省のインターネットサイトには 2000 年以降の優秀作品がアップされている）。http://www.pch.gc.ca/march-21-mars/winners/index_e.cfm）。

メディア・リテラシーを学ぶ場でこの「人種差別をやめよう！P S A」を使う際には、参加者が審査員になったつもりでグループをつくって対話をしながら作品の技法や表現内容を分析し、評価を行う。参加者によって着眼点や評価する部分が大きく違うし、参加者が「差別をなくす」というメッセージをどう構成するのが望ましいと考えているのかも伺えて興味深い。

いよいよ制作活動へ

いよいよ 2 日目。まず確認したのは、映像作品の制作といつても、洗練された作品を作るのが目的ではなくあくまでも自分たちのメッセージを形にすることが大事だということ

である。

その上で、参加者一人ひとりが自己紹介をかねて、いま社会に対して発言したいことを出し合った。すると、次のような意見が出された。

- ・子どもの遊び場やコミュニケーションを奪っているのはおとなでは。
- ・どうして勉強するのか分からぬ中学生になぜ学ぶのかを伝えたい。ジェンダーとの関係で伝えたい。
- ・ジェンダーに気づく何気ないきっかけとは？
- ・職場（小学校）の働き過ぎをなんとかしたい。
- ・「死」を通じて「生」を考えたい。
- ・コミュニケーションが希薄なおとなの世界。でも、出会うって楽しい。
- ・「きしょい」「きもい」と思ったことをそのまま口に出す子どもたち、なぜ？
- ・地域の中で発見できる大事なことがたくさんある。
- ・「冷凍ギョーザ事件報道」どうなっているの？
- ・（教師批判に対して）教師は今でもがんばっている。これ以上どう頑張れと言うの？

次に共通する問題意識を持った参加者数人でグループをつくり、制作する作品のテーマや構成案について話し合うことにした。約30分後に3グループそれぞれから構成案を発表。グループの話し合いは活発で、進行する側が驚くほど次々に作品の構成案が出されてきた。

グループは昼食の間も話し合いを続け、構成案を簡単な絵コンテにする、撮影に必要な小道具の用意、グループによってはリハーサル、ロケハンと慌ただしい中にも和気あいあいと作業が続いた。用意されたビデオカメラは3台。編集機はないので、構成案を作つてその通りに撮影して作品の出来上がりである。

コミュニケーションを創りだす

当日は、午前11時半にグループに分かれ、制作のための話し合いを始めてから約3時間後の午後2時30分にはふたたび全員が集まって作品の上映会を始めることができた。最後のセッションはグループの作品を見ながら、参加者は作品を様式と内容の両面で評価して、再びグループで話し合った。ここで出来上がった作品を簡単に紹介しよう。

1) 「学ぶって楽しい」

なぜ、学ぶのかを中学生に向けて伝える。インタビュー形式で中・高生の「子ども」と、戦争のため十分に学べなかつた「80歳代の女性」が登場して学ぶことがどんなに楽しいかを語るという設定。

2) 「ワークライフバランスはワークバランスから」

働き過ぎの同僚に向けて、まず目に見える職場環境から変えていこうというメッセージ。残業している教師のもとへ事務機器の仕事をしている卒業生が遊びにくるという設定。

場面ごとにナレーションが入る。

3) 「子どもは見ているおとの世界」

子どものコミュニケーションが無茶苦茶だと嘆くおとなに対して、まずおとなから変わっていく必要があるというメッセージ。おとの危ないコミュニケーションを3場面で示し、最後に子どものメッセージがテロップで出る。「おとなって、きしょい」。

合評会で出されたのは次のような意見である。

- ・だれもが発言したいことを持っていると思った。
- ・制作は難しいと思っていたが、手順を踏んでいくと案外できてしまった。
- ・カメラワークや画面の切り替えなど、振り返りの後、手直しするともっと見やすい作品になる。
- ・制作する過程の話し合いが楽しい。
- ・参加者の意見が排除されることなくそれぞれ作品の中に生かされる。

今回2日間の講座を通して感じたのは、第1に予想した以上に「創る」という活動は楽しいということだ。中学生の作品にも創造する喜びがあふれていたが、今回の3作品にもそれが言える。中学生もおとなも自分が主体になって何かを生み出すのは、楽しいのだ。

第2に、だれもが社会に対して発言したいことを持っているという当たり前の事実を再確認したことだ。日頃は「あなたは社会に対してどんなことを発言したいですか?」と問い合わせられることは稀である。だが、今回の講座ではそれが引き出されて一つのコミュニケーション作品として表現されることになった。再確認したことのもう1点は、問題は技術ではなく何を社会に発言したいのか、というメッセージであるということだ。

第3に、2日間の講座がうまくいった背景にはセンターが長年にわたってメディア・リテラシーを取り組んできたことがあげられる。メディア・リテラシーでは対等な対話を基本にしている。今回、初めて参加する人も結構いたが、長く学んでいる人が各グループにいたために、初めて参加した人びとを包み込み、それぞれの意見をうまく作品に生かすことが可能になったのではないだろうか。

また、センターには機材に長けた職員がおられて、2日間ともサポートしてくれたが、このような活動をする上では欠かせない。

今回の講座で生み出されたようなわくわくする創造的な楽しさは、本来メディア・リテラシーを学ぶ場がクリエイティブな対話を生み出すことによってもたらされる楽しさと同じである。「みんな発言したいことを持っている」「自分が主役になってなにかを創造するのは楽しい」という気づきはメディア・リテラシーの学びが目的としているコミュニケーションする権利の自覚につながるだろう。その意味でもメディア・リテラシーの学びが基本的な権利を自覚することを目的とする人権教育そのものであるという指摘も可能になると思われる。メディア・リテラシーの学びを人権教育として位置づけていくための理論的な整

理はまだまだ必要だが、幸い今回の参加者は学校や企業、市民対象に人権の学びをつくるために活動しておられる方が多数参加しておられた。メディア・リテラシーの学びと人権教育をつなぐための理論的な整理は、今後の共同作業の課題としていきたいと思う。

なお、最後に高槻メディア・リテラシープロジェクトの最近の動きだが、2年目の授業の成功が評価されて3年目も2年生の選択科目を活用して授業を継続することになった。授業を含むプロジェクトの展開については、次回にあらためて報告することにしたい。

(西村寿子 FCT メディア・リテラシー研究所)